

クラーク先生の時代 (その1)

志賀 武

クラーク先生(William Smith Clark, PhD 1826-1886)といえばBoys Be Ambitious. 「少年よ、大志を抱け」(以下BBAとす①)の言葉とともに日本人ならだれもが知っている明治維新の偉人、恩人であります。札幌農学校(北海道大学の前身)の初代学長として、多くの人材を育て、外交官、高級官僚はもちろんのこと、感化された人々の多くが以後の日本の発展に多大に貢献した教育者、学者、実業家、独立農業家、宗教家となったこともご存知のことでしょう。また小生のように凡俗ながらこの言葉に夢を与えてもらいつつも、心中そのまま温存した人々は星のごとくあるに違いないでしょう。

今回意外なことから畏友K氏にヒントを与えられ、本文を寄稿することができました。この偉人に対して私が知っていたつもりの多くの誤解はおそらく読者諸兄姉と共有する点も多いことと感じ、拙文としましたが、なおさらなる誤りを恐れる次第です。

私も文中でClark博士と呼ぶよりも教育者として重要視したいので先生と呼ばせてもらいますが、ご存知のとおり先生はこのとき50歳、1876年(明治9年)からわずか8ヶ月間の教育をされました。職名は自らもPresidentと表明し皆も学長として尊敬していましたが、当時の制度上では校長は官吏某とされ、先生は教頭となっています。これでは失礼であり、そのためか後世では地質学者、植物動物学者として“クラークはかせ”と尊称している人々が多いのでしょうか。

またご自身が設立したアマースト(Amherst)農業大学の現学長であったため、1年間の特別休暇(これは未確認ですが現国内研究者が渴望して未だに獲得できない長期有給休暇sabbatical leave制度がすでに米国にあったのでしょうか。)を得て二人の教員を従えて来日し、また厳格にも遅滞なく帰国されたためです。この理由は後述します②。私自身もわずか数年ですが授業を持つことがありましたが、学生の数人にさえ何かを残せたかを考え比べると、その影響力は巨大にして奇跡的であります。

なぜかとも短期間に先生は影響力を爆発させ得たのかが、小生の疑問の1つであります③。もうひとつはなぜ多くの学生たちが従順に感化され成長し、しかも多方面で大成できたかです④。またひとつはいったい誰がこの偉大なる人物を連れてきたのかであります⑤。

①まずBBAと「馬上の訓言」について： BBAは永らく冒頭のメッセージのまま記憶され、北大校内と札幌市郊外南部の羊ヶ丘公園に銅像とともにこの銘板が示されています。この言葉は、先生がいよいよ帰国される時、学生など総勢25名(一期生はこのときすでにわずか16名のはずですが、馬上26人の勢揃いの記念写真がある)が吹雪の中をどこまでも馬で付いてくるので(馬術も訓練されたのだ)、途中10kmあまりで休憩されたときの別れの言葉とされています。

BBAは本当はBoys, be ambitious like this old man!と言われたようで、「学生の諸君、わしのように意欲的に 頑張るんだぞ！」(句点に注意)の意味が近いと小生は思います。like this old manも色々に解釈できます。これが名句「馬上の訓言」として讃えられ、ちょうど名画「シェーン」のエンディングのように、「ひと鞭入れてさっそうといざ去り行かん！」と劇画風にも伝えられていますが、馬上から偉そうに言う場面のはずもなく、厳寒地での筆記録は困難でしたでしょうし、しかも録音機などはないのですが、この冠頭句は間違いないそうです。

ではなぜこの言葉が今なお生きているかです。それは1、2期生(または4期生まで)の学生が、今で言えばものすごいIQ少年たちの集まりであったようなのです。彼らはなんと16~19歳で全国から入学してきたのです。厳しい授業環境の結果、一期生卒業者は入学25名中13名と記録されています。そのうち数名のその日の日記にはそれぞれ表現が若干異なるがBBAを確かに話されたと記しています。特に、後に当農学校教授、旧制甲府中学校長、漢字音韻学者となった大島正健はこのとき17歳にしてすでに英語に完熟し、しかもこの状況を「青年奮起立

功名、馬上遺言籠熱誠・・云々」と見事な漢詩で記録したため「馬上の訓言」として後世によく伝わったものと考えられます。また卒業生のいく人もが母校教授となりましたが、再び「BBA運動」を興してこれを教育の要としたのは当学校が廃校の危機を脱し、1892年官制学校として安定し1918年帝国大学となった以降だそうです。

しかし戦前に米人を尊敬し続けることが如何に困難であったかは想像に難くありません。

大島校長は札幌時代のこれらの逸話を各地で繰り返し口演されたようですが、Clark先生の遺志を受け継いだ優れた教育者の一人とされています。さらには甲府中学卒業生の石橋湛山（1956年総理大臣、自由主義者）が孫弟子として活躍し、母校にBBAを揮毫掲額するなど、全国に伝搬させていったのでしょう。私もBBAとエルムの梢に憧れた一人ですが学力の関係？で入学は取りやめました。

しかるに私自身が高校生時代からどうしても引っかかる言葉はambitiousであります。この言葉は辞書的には「野望、野心的な」あるいは「大げさな」など米人からもあまり良い意味には使わないと聞かされながら、この言葉がかくも賞賛されたのはなぜなのか、また逆にこれが彼と彼の教え子らを非難中傷する材料に利用される時代にも隠されなかったのはなぜかでありました。

ところが先日K氏よりBBAは下記の英文が全文である旨の口演を聞いたぞ、との連絡を受け驚愕歓喜しました。すなわち“Boys, be ambitious. Be ambitious not for money or for selfish aggrandizement, not for that evanescent thing which men call fame. Be ambitious for the attainment of all that a man ought to be.

(少年よ、大志を抱け。お金のためではなく、私欲のためでもなく、名声という空虚な志のためでもなく、人はいかにあるべきか、その道をまっとうするために大志を抱け。) 北海道大学図書館報『榆蔭』No.29よりとの由。これを読むと、真理に近く、なるほどそういう意味かと膝を打った次第だったのです。しかし感激して間もなく、これも真実ではないのではないかとの情報が入りました。

(つづく

